大崎短歌会

兼題『月・自由』

鳥になり清しき月に吾が夢を　井元かず子
平穏な日々有らんと祈る

六年ぶりはるばると来し曾孫の　穂園芳江
語りの楽し名月の夜

露ふふみカボチャの蕾開き初む　山下海征
雫落として月渡り行く

サラサラと川は流れる持留川　坂元つる子
水面に浮かぶ黒き水鳥

すすきの穂さがし歩みき十五夜に　柝山重子
実りの秋を夫と愛でたり

ひがん花咲く頃蒔けと導きし　本後淑子
祖母思いつつ野菜の種買う

十五夜の月の明り誘いて　川崎健一
けがれなき天のたらちねの母

軒端より辰巳の空を眺むれば　実吉安仁
緩りと登る仲秋の月

今宵またガザのいのち召さるるを　馬場みさ子
聴きて迎へむ月の兎や

名歌
秋風にたなびく雲の絶え間より　左京大夫顕輔
もれ出づる月の影のさやけさ

薩摩郷句

兼題『薬』

毎日団子　何が効こかい　痩せ薬
（唱）薬ゆ飲じょっじ　旨ま旨ま団子　諸木小春

今日も病院　飲まん薬ゆば　また沢山
（唱）医者しぇな平然と　効っ言て返答　上窪小絵

蚊の食っ目　がらっぱぐさが　良か薬
（唱）揉んで擦れば　痒さも止まっ　満石うらら

此んた効っ　此んた効かんち　薬い小言
（唱）薬の事なあ　知たん事ちゃ無し　遠矢酎多

にこっなっ　孫が薬の　爺の病気
（唱）来たか来たかち　金どん呉れっ　西ノ園ひらり

狂句を捻っ　球を打っとが　良か薬
（唱）ワンどが入れば　頭も冴えっ　北村虎王

何処け行っも　薬の分な　持っ歩りっ
（唱）命綱じゃが　忘れちゃならん　藤元鬼瓦

薬好っ　麻薬代用い　沢山飲っ
（唱）十時三時ち　茶請けんごっ　上村牛歩

薬い貰れ　帰路やスーパで　焼酎を買っ
（唱）子供じゃなかで　叱いもならんし　二見愚楽満

老夫婦　薬い数んぜで　良か算数
（唱）朝三個飲っ　晩にな四個　長重リリー